

『骸骨ビルの庭』刊行記念対談

いかに〃名文〃を書かないか

宮本 この小説『骸骨ビルの庭』は「私がその風変わりなビルの管理人としてすごしたのはわずか三カ月余りの期間にすぎません」という書き出しではじまりますが、「群像」の連載一回めでは「三カ月」ではなく「十カ月」と書きました。十カ月の間に起こったことを書くつもりだったんです、最初はね。でも、書きはじめたら、こんなものを十カ月も書いてたら大変だと気づいて（笑）。

小川 これから長い連載を始めるのに、三カ月というのはちょっと短い気がして心配ですね。やはり、十カ月くらいにしておいたほうが安全だと思います（笑）。

それにしても、主人公のヤギシヨウこと八木沢という男は、短い期間に大変濃密な体験をしますね。読み終わった後、たったの三カ月だったのかと思ってしまうました。三年ぐらい過ごしていたかのような錯覚に陥ります。でも、ヤギシヨウさんは地理的にはあまり移動してないですよ。基本的にはこのビルにいて。

宮本 ほとんど骸骨ビルの中だけでの話です。畑と屋上と、あとは商店街（笑）。

小川 最後にちよつと京都へ。あれが彼にとって唯一の大冒険です。

宮本 一番の遠出です。

小川 その地理的な移動の割に、読者としては途方もない長い旅をしたかのような印象を受けます。時間的な、過去と現在の会話の振幅が深いんでしょうね。

宮本 悪いやつを二、三人出すつもりだったんですけどね。

小川 夏美という女性が悪人の役目を負うはずだったと思うんですけど、彼女はほとんど登場しませんね。

宮本 ほとんどしゃべりません。ヤギシヨウがちらつと顔を見て漬物を買うだけですから。それともう一人、多分暴力団員であろうヨネスケも、影がうろちよろしているだけで姿は見せません。

小川 彼も悪役ではないですよ。

宮本 悪役ではないです。僕は、悪人が書けない作家だといわれていますので（笑）。

僕は、骸骨ビルを能の舞台にしたかったです。夢幻能の世界にしよう、と。最初に頭の中にあつたのはそれだけです。舞台さえできれば、あとは自然に動いていくだろう、と。

小川 この小説のヒントになるような実在の事件とか、モデルはないんですか。

宮本 全くありません。この小説をはじめの前、読売新聞の朝刊に『にぎやかな天地』を連載していました。この中に、主人公が「戦後に孤児を育てたのに、その育てた孤児の女の子からいたずらをされた」と訴えられて非業の死を遂げた人間がいる。この男の真実を書いて出

版しないか」ともちかけられる場面があるんです。『にぎやかな天地』が本になってその部分をあらためて読み返したときに「よし、これを書こう」と決めたんです。とはいえ、まったくの架空の話でしたから、それからがたいへんでした。あの時代にそういう話が実際に成り立つかどうかから考えなければなりませんでしたから。

小川 #十三「じゆう／そう」という場所が効いていますね。

宮本 きわめて大阪的などころですからね。戦後の、あのあたりならこういう話はあったんじゃないかと思っただんです。

小川 あってもおかしくない。

宮本 僕、幼い頃に戦争で焼け残ったビルで暮らしていたことがあるんです。三階建てのビルを父が借りて商売をはじめたんです。戦火にも耐えたビルですから、とにかく頑丈なんです。壁なんか、今では考えられないぐらい分厚い。だから、どんなに暑い日でも中は涼しい。そのかわり冬はなかなか部屋が暖まらない。占領軍が事務所として使っていた時期があったので、あの時代でもトイレは水洗でした。そういうビルに五歳から小学校三年生まで暮らしたんです。堂島川と土佐堀川に挟まれたところにあったそういうビルを、もう少し大きいものにして十三へ持っていった。

小川 なるほど。

宮本 十三を舞台にしたのは、自分の土地勘というか、そこで生活している人の息遣いみたいなものを僕自身が知っている場所だったからです。

小川 小説の舞台として、ぴったりの雰囲気を持った町ですね。

宮本 書きはじめる前に、あの辺をうろうろ歩いて取材しました。ラブホテル街とか。

小川 「エデンの仔猫」という絶妙な名前のラブホテルが出てきます。といっても、私はラブホテルに詳しいわけじゃないのでよくわかりませんが。でも、いかにもありそうで……。

宮本 淀川の堤を歩きながら、工場街というわけにもいかんな、とか、商店街から離れているのも困るな、とか考えて。

小川 商店街は重要ですね。ヤギショウさんが買い物したり、食事をしたりしなくちゃいけませんから。

宮本 ダッチワイフもちゃんと取材したんです。

小川 市田さんでしたか、唐木工業の。ダッチワイフをつくるきっかけが障害者の弟だったというエピソードが、胸を打つというか、胸が痛いというか。

宮本 じつは、唐木というのは「群像」の元編集長の名前です。それで唐木工業（笑）。取材には、その唐木と僕と連載担当者とで行きました。上野にあるオリエント工業という会社のショールームに、男ばかりでぞろぞろと。誰も見てへんやろなど、きよろきよろしながら入っていった（笑）。

唐木と二人でダッチワイフのスカートをめくって、これはオプシオンかな、別のものも装着可能な、なんていいながら見てたら、店員さんがいきなり股間に手を入れてピューツと引きずり出して。二人で「うわーっ」とかいうてね（笑）。

小川 それは驚きますよね。あの部分は取り外しができるんですか……。へえーっ。綿密な取材に基づいて書かれているんですね。ダッチワイフについては、上手く映像を思い浮かべることができませんでしたけれど（笑）。

唐木工業もそうですが、骸骨ビルには、何やっているんだろなというような種類の職業が集まっていますね。これを考えるのがなかなか骨だったんじゃないかと思うんですけど。日本粉新聞社とか、探偵事務所もありましたし。スイートパンサー社は……。

宮本 S M雑誌を出しているところですか。

小川 少年少女たちが大きくなった後、どういう仕事を持つかということは、その子たちの人間性、人生そのものにもかかわってくるので、骸骨ビルの表札のところはどういう会社名、名前が載っているかは非常に重要だと思います。

宮本 重要です。あそこに住んでいる連中は、サラリーマンでは決まてないわけです。全部が全部真っ当に育つはずもないです。じゃ、真っ当に育つとは何なのか、ということですが、法を犯したりせずに、ちゃんと世の中を渡っている、ということなんです。骸骨ビルが夢幻能の舞台だとするならば、そこで面をかぶっている連中は、やっぱり普通の面ではないかんわけです。といって、あまり奇天烈でもダメですね。

小川 トヨタが何十年ぶりに赤字だとか、株価が幾ら下がったとか、そんなニュースばかりを耳にしていると、世間というのは大きな会社や株や為替で成り立っているんだなと錯覚してしまうのですが、いや決してそうじゃない、ダッチワイフをつくったり、粉新聞を出したり、おかまバーに勤めたり、サバの味噌煮を百人前つくったりしている人によって世間は成り立っているんだ。この小説は、そういうことを思い出させてくれます。

「みなと食堂」の湊比呂子さん。私はあの人が一番印象深いです。何人か人間が集団になると、世話を焼かざるを得ない立場に立つ人が必ず出てきます。比呂子はほかの子供のために尽くして、大人になっても人の食べるごはんを一生懸命つくって、人を元気にするために自分を犠牲にしている。この比呂子という人が、この小説の主題を体現しているように思いました。

宮本 比呂子は、ヤギシヨウを一番利用した人間です。それもしたたかに——彼女は意図してはいなかったんですけどね。

この小説では、骸骨ビルの住人が、ヤギシヨウがどういう質問をしたとかということは一切関係なしに、勝手にしゃべり出します。最初に話をするのは茂木泰造で、次が比呂子です。

比呂子の話を書くときに、彼女にヤギシヨウを動かす役割を担わせることにしました。比呂子にどういふことをしゃべらせたらヤギシヨウが行動をおこすか。それを考えるのに苦労しました。

小川 最初のほうで、彫金をやっていたチャッピーがやけどを負ったり、あるいはヤギシヨウさんがインフルエンザになったりという偶然によって、みんなが舞台から離れられなくなる構成になっていますね。

宮本 抜き差ししなくなっていくんです。ヤギシヨウ自身の個人的興味——阿部轍正って

どういうやつだったのか、桐田夏美という女はなぜあんな行動をとったのか、そういうものに引かれてヤギシヨウが行動しはじめると、いつの間にか抜き差ししなくなっている。どのように抜き差ししなくなさせるかが、この小説を書く上で一番しんどかったですね。

小川 家族にまで危害が及ぶ状況になっているのに骸骨ビルをほっぽり出して逃げられないという気持ちにさせなくちゃならないわけですね。ヤギシヨウさんがここにとどまることさえわかれば、あとはそれこそいろいろな登場人物たちがごく自然に語りはじめますよね。

宮本 ええ。彼ら、彼女らが一つの糸を紡いでいく。それでいいと思っていました。

小川 この小説では、畑仕事が必要な役割を果たしています。

宮本 僕は畑仕事をしたことがないんですけど、この小説を書き出した頃、偶然にも僕のホームドクターが借りた土地で畑仕事をはじめて（笑）。

小川 ちょうどいいモデル。そういう幸運って訪れるものですね、いい小説には。

宮本 苦労話をしに来るんですよ、収穫した野菜を持って。いま一番困る害虫は何や、とか、これこれこういう堆肥を使うんだ、とか、畑には人糞がいいんだけど人糞は手に入らないんだ、とか。

小川 ヨネスケが親の仇みたいに畑の虫をとることに執念を燃やすエピソード、いいですね。彼は乱暴を働きたい欲求に満ちている子供だったと思うんですけど、それを虫退治に転換していく。その暴力的なエネルギーを、畑というか大地は許すんですよ、吸収してくれるというか。

宮本 ヨネスケがいなければ畑の野菜のほとんどは害虫にやられたでしょう。当の本人はその後、社会の害虫になりましたけど（笑）。

小川 子供たちがそれぞれの役割をちゃんと果たしています。自分にできることが何かしらある。虫を取る子もいれば、雑草を抜く子もいて。

ナナは、性別の問題があつて、非常に生きづらい人生を送っていると思うのですが、畑仕事で汗を流して得た現実、その圧倒的な現実を経験していたからこそ、その後も上手に生きることができたんでしょうね。女性として社会の中にちゃんと居場所を見つけているなという感じがします。

宮本 ナナにはモデルがいるんです。富山に「ろくでなし」というおかまバーがありましたね（笑）。

僕は北日本文学賞の選者をやっていて、毎年富山に行くんですが、富山に行ったときは必ず「ろくでなし」に寄るんです。そうするのがいつの間にかお約束になっていて。

小川 気がつくと「ろくでなし」にいる（笑）。

宮本 そうなんです。十数年通っているそのお店で、その世界の人たちのいろんな話を聞きました。原稿に間違えて店の子の名前を書いてしまうこともありました（笑）。

*

小川 フランクルの『意味への意志』という本が出てきますね。そこに「われわれが彼に与えることのできるもの、(略)それはただひとつ、実例」という文が引かれています。実例に対しては、もはや知的な答えはあり得ない。ただ実存的な答えしかあり得ない。阿部と茂木という二人の育ての親はもちろんです。畑の中で育っていく作物も、実存そのものです。子供たちは虫に食われたキャベツから理屈じやないものを教わっている。ですから、畑と阿部と茂木は、切っても切り離せない。庭に畑をつくったのは、食糧に困っていたという実質的な理由からでしたけど、それは正しい道だった。子育てという問題に直面したとき、ほとんど無意識に正しい方法を選んでいたんですよ、阿部という人は。

宮本 茂木が阿部に「自分のことを考えての苦労やから、苦労と感じるんやないのか？」という場面があります。子供を育てるとそういうことを切々と感じませんか。

小川 子供がいると、一番の心配事が子供のことになる。自分が死ぬことよりも、自分じゃない子供という他者が死ぬことが一番悲しいことになる。これはとても幸せなことですね。

宮本 世の中にはどんなに欲しくてもお子さんに恵まれない人もいますから、子供に恵まれた人はとても幸せなんです。親って子のためになら何でもしますし、そのときは自分のための苦労と思ってませんもん。

小川 自分のためだと限界があると思うんです。

宮本 だから、苦労だと思っんですよ。畑を育てるのも同じです。水を撒くのは青々と茂っている葉っぱを枯らしたくない、育てたいからです。野菜づくりの喜びは、そこにあるんだと思います。収穫というのは、後々についてくるご褒美のようなものです。野菜づくりや稲づくりで苦労する農家の方たちは、生活がかかっているから豊かな収穫というものが当然懐勘定としてあるだろうけど、育てるときの気持ちは子供を育てるときと同じだと思っんです。

小川 犬などのペットも同じですね。そういう存在に味わわされる苦労というのは、実は苦労じゃない。そういう存在があるからこそ得られる充実感、喜びはかけがえのないものなんですよね。親は子の心配をせざるを得ない。子供のほうもこの世界のどこかに自分のことを心配してくれている人がいるんだという安心感を持って巣立っていくんですよ。

茂木が、トラックの運転手をしているトシ坊のためにお弁当をつくらせている場面がありますが、私、あそこが好きなんです。このときの茂木はまさに親ですよ。

宮本 明太子を焼いている。

小川 ほつとくとラーメンとか油っこいものしか食べないから、昼と夜と二食用意してやる。しかも焼いている明太子が絶妙のミディアム・レアだ、という表現があつて、ああ、この人、本当に親なんだというのが、あのミディアム・レアの明太子から感じ取れますね(笑)。

食べ物も重要な要素ですね。読みながらいろいろいるなものが食べなくなりました、私。

宮本 小説の中でおいしいものを出すの、好きなんですよ。

小川 茂木さんが好きな鯛めしもおいしそうです。炊き込むのではなくて、焼いた身をほ

ぐして混ぜてつくる鯛めし。

宮本 あの鯛めしは、祇園にある、カウンターだけのちっちゃなお店で食べたんです。二十年前のことですけど。あまりおいしいから、どうやってつくるのか教えてもらったんです。けど、結局、自分では一度もつくってませんね。

小川 小説の中でつくったんですね(笑)。でも、比呂子さんをはじめみんなが上手に料理をつくりますよね。この描写は、お料理番組を夜中にごらんになっている方にしか書けないなと思いました(笑)。

宮本 何で知ってるんですか(笑)。

*

小川 ところで、チャッピーは、子供たちの中でほとんど唯一人、畑仕事を憎んでいますね。彼は畑仕事为重労働だったと不満をいつているだけでなく、阿部さんと茂木さんのところに夜な夜な女の子たちが通っていたことに疑いの気持ちも抱いていたと告白します。ところが、私が一番信頼している比呂子さんは、阿部と茂木のためなら何でもやりかねないくらいチャッピーは二人を大切にしているといいますよね。あの関係も微妙で、とても興味深かったです。

宮本 チャッピーは、あの骸骨ビルでつねにつまはじきにされてきたと僻んでいる男ですが、彼もやつぱり、自分を一番かわいがってほしかったんじゃないかな。

小川 夏美の男の子版みたいな立場だったんでしょうね。

宮本 似たもの同士が寄り添って、お互いの傷口をなめ合うような、そんな時間があったのかもかもしれません。他人事みたいにいいますけど(笑)。

小川 そうか、なるほど。書かれていないこともいっぱいあるんですね。

宮本 そうです。いかに書かないか、なんです。五十を過ぎてからは、そのことばかりを考えています。

小川 この小説の語り手はヤギシヨウさんなので、基本的にヤギシヨウさんが見たこと、聞いたことしか書けないですから、限界はあるわけです。でも、小細工を施せば、その限界を超えることは……。

宮本 もちろん、できます。

小川 でも、そういう小細工をしないで我慢するんですね。

宮本 最後にチャッピーの話を入れることもできたんです。実際、そういう誘惑にも駆られました。ただ、一度書いてしまうと、それを消すことはなかなかできないんです。落款を押し忘れてしまったような気がして。作家は、登場人物に語らせることは簡単にできるんです。だけど、それをすると、せつかくあけていた余白が埋まってしまいます。最初からずっと続けてやってきたことが徒労に終わってしまうんです。

小川 それにしても、いいラストシーンですね。こういうラストしかないというラストでし

た。

宮本 褒めていただければかりで恐縮です。

小川 ラストで悩むことはなかったんですか。

宮本 あまり悩みませんでした。いかに語らないか、ということと、最後の場面で一行たりとも名文を書かないようにすることは考えていましたけど。

小川 読者が名文と思うかどうかじゃなくて、書き手である作家が名文と錯覚するような文を書かないということですね。

宮本 ええ。歌でいったら、一節こぶしをきかせるというのを最後でやってしまわないようにするということです。五十を過ぎてから、そういうことにすごくこだわるようになりまして。

井上靖さんが『風濤』で読売文学賞を受賞したとき、選者の小林秀雄さんが「名文などというものは井上君には朝飯前の仕事だ。こういう名文がこの『風濤』という小説には一カ所しかない。一カ所しかないことで、私はこの小説を評価する」というような選評を書いているんです。

小川 すごい選評ですね。

宮本 ええ。このことを書いた井上さんのエッセイがあるんですけど、どういうわけか「骸骨ビルの庭」の最終回を書こうというときにこのエッセイのことを思い出して、『井上靖小説全集』を引っ張り出して読んでから、また「骸骨ビルの庭」のラストを読み返してみたら、最後に近いところでの三行がすごくおしゃべりのような気がしたんです。でも、残しました。一文ぐらいいいじゃん、って（笑）。

小川 とらなくてよかったですよ、これは（笑）。意味を考えさせられますもの。

宮本 原稿の最後のところを書いているときはその前の文で終わることも考えましたけどね。

小川 それもありですよ、無責任ないい方ですけど（笑）。

宮本 でもまあ、あってもいいかな、と。

小川 他人の子供のために人生を捧げた人がなぜこんな死に方をしなければならなかったのか。それが最後までずつとひつかかっていたかもしれませんけど、茂木さんの最後の言葉で納得できました。阿部さんはむしろ世間からの非難を喜んで受けて死んだだろうな、と。

宮本 人間は必ず死にます。病気だろうが、老衰だろうが、あるいは、若くして事故に巻き込まれることだってある。若い自分の息子が交通事故で死んだら、何で死んだんだろう、年寄りのおれたちが死なないで何でこの子が死ななきゃいけなかったんだろう。そう考えるだろうなど、大きな事故を見るたびに思います。だけど、死に方によって、死のとらえ方が変わるというのはおかしいと思うんです。

たいへん僭越な、おこがましいいい方ですけど、人の死を茂木泰造のように受け取ってもらいたいなと思うんです。もしそういうことが自分に降りかかったときは、そう受け取りたい、受け取ろう、と。僕は、阿部轍正の死をそういうふうにかけて書き出して、それを説教

臭くなく、抹香臭くなく、どのように表現するか、どういう言い方をしようかと考えながら書いていました。ラストの茂木の言葉で、僕のこの小説、僕の拙い夢幻能の世界の幕を下ろすことができたと思っています。